援助行動が自己呈示とみられるとき： 観察者の有無と性別が動機推測に及ぼす影響¹⁾

山 本 佳 祐

大阪市立大学大学院文学研究科

池 上 知 子

大阪市立大学大学院文学研究科

要 約

山本・池上（2019）は、第三者が自己呈示に関する素朴理論に基づいて援助者の動機を推測しているという仮説を提起し、援助場面における観察者の存在が動機推測に影響することを見出した。本研究は、彼らの結果の再現性を確認することを第 1 の目的とし、さらに観察者の性別が動機推測に及ぼす効果を明らかにすることで、上記仮説を支持するより強力な証拠を提示することを第 2 の目的とした。大学生 277 名を対象に援助場面のシナリオを用いた質問紙実験を行った。山本・池上（2019）と同様に、観察者がいない状況よりも、いる状況の方が、援助者に自己呈示動機が推測されやすいことが示され、観察者の存在が動機推測に及ぼす効果の頑健性が示された。より重要なことに、援助者と同性の観察者がいる状況よりも、異性の観察者がいる状況の方が、援助者に自己呈示動機が推測されやすかった。ただ、単なる異性の観察者がいる状況と、援助者が意中に思う異性の観察者がいる状況の間では、動機推測に差がみられなかった。しかし、観察者の存在および観察者の性別が動機推測に及ぼす影響は、2 種類の援助場面間で一貫してみられ、効果の頑健性が確認された。よって、上記仮説を支持するより強い証拠が示された。

キーワード：動機推測，自己呈示，観察者，援助場面，第三者

問 題

芸能人が寄付を行った際に「売名行為ではないか」等の批判が起こることがあるように、援助者は常に他者から肯定的に評価されるとは限らない。本研究は、他者を助けることは社会的に望ましい行為であるにもかかわらず、援助者を否定的に評価する第三者の心理について検討した。

援助者への評価は援助行動の背後にある動機をどのように推測するかによって規定される（Carlson & Zaki, 2018 ; 針原, 2015 ; Reeder, Vonk, Ronk, Ham, & Lawrence,

2004）。Carlson & Zaki（2018）では、援助者の動機が利己的と伝えられた参加者は、利他的と伝えられた参加者や、動機に関する情報が伝えられなかった参加者よりも、援助者の利他性を低く評価していた。Fein（1996）によれば、他者の行為から態度や特性を推論する際に広く認められる対応バイアス（状況要因を軽視し行為自体が含意する特性を行為者に過度に帰属すること：Gilbert & Malone, 1995）が、行為者の下心（取り入り等）に関する情報が与えられると、生じにくくなることが明らかになっている。Reeder et al.（2004）は、この Fein（1996）の知見に基づき、援助者の利己的動機の推測を促す情報

第 1 著者連絡先 e-mail: kei.1993m.t.101631@gmail.com

電子付録 : <https://doi.org/10.2130/jjesp.1914>

1) 第 1 著者が平成 29 年度に大阪市立大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部に加筆，修正を行い，まとめ直したものである。本稿の一部は，日本社会心理学会大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度により旅費の支援を受け，The Society for Personality and Social Psychology 第 20 回大会で発表している。

を与えることによって、参加者が援助者に対して親切さの傾性を帰属しにくくなることを示した。具体的には、教授が大量の雑誌の整理に困っているところに通りかかった学生が作業を手伝うと申し出る場面について、被援助者となる教授が援助者となる学生の奨学金の選考に関わっているかどうかの情報が操作されていた。このような情報が提供されると、そのような情報が提供されない場合に比べ、援助者の利己性が推測されやすくなり、参加者は援助者を親切であるとみなしにくくなった。この結果は、状況要因が動機推測を介して傾性帰属に影響を及ぼすことを示唆している。

しかしながら、上記の研究からは、第三者が何に基づいて援助者に利己的動機を推測するのかについて、いくつかの示唆が得られているものの、十分に解明されているとはいえない。Reeder et al. (2004) で扱ったような被援助者に取り入るインセンティブの有無以外にも動機推測に影響を及ぼす要因が存在する可能性は高い。また、Carlson & Zaki (2018) の研究では援助者の動機が明示されており、援助者の意図が明白な場合を扱っていた。現実場面では、援助者の意図が明白な場合はむしろ少なく、第三者は主観に基づいて援助者の動機を推測することが多い。第三者の主観に基づいて推測された動機の内容は、援助者の実際の動機と必ずしも一致しているとは限らないにもかかわらず、利己的にみなされた援助者が批判されるという事態が起こりうる。そのため、援助者の動機が明白でない状況のなかで、どのような要因が動機推測を規定するのかを検討することが重要であり、本研究ではその点を検証することとした。

観察者の存在が動機推測に及ぼす影響

本研究は、援助者の動機が明白でない状況の中で、動機推測を規定する要因として、援助場面における観察者の存在を取り上げる。観察者がいると、人は自己呈示動機²⁾が喚起されやすい (Cottrell, Wack, Sekerak, & Rittle, 1968)。自己呈示動機が喚起される程度は、自己が価値を置く目標と観察者との関連度によっても異なる (Leary & Kowalski, 1990)。例えば、青年期・成人前期の重要な発達課題である「友人獲得」や「恋人獲得」という目標 (Havighurst, 1972 児玉・飯塚訳 1997) を行為者が持つ場合、それらの目標達成に関連する観察者がいる時の方が、自己呈示動機が喚起されやすい。そして、このような自己呈示理論を、人々は経験に基づき素朴に理解しう

る。その根拠の一つに、谷口・大坊 (2005) が挙げられる。谷口・大坊 (2005) では、質問紙調査において、参加者に親しい異性を一人想起させ、その異性と会う際に、自己呈示を行うことをどの程度意識するかについて自己報告させている。結果として、異性の友人または恋人を想起したいいずれの場合にも、参加者はその異性との関係が重要であると捉えているほど、社会的望ましさや個人的親しみやすさといった側面の自己呈示を意識しやすいという正の相関関係が確認された。自己報告式の調査で得られたこの知見は、自己呈示動機がいつ喚起されるかについて、人々が素朴に理解していることを示唆している。以上より、第三者は自身の経験から自己呈示理論を素朴に保持しており、その素朴理論に基づいて動機推測を行うとする仮説が立てられる。

このような観点から、山本・田中 (2018) 及び山本・池上 (2019) は、観察者の存在の影響を検討した。これらの研究では、架空の援助場面を描いたシナリオを提示し、援助者の動機を推測してもらっている。山本・田中 (2018) では、観察者の有無により動機推測に差がみられなかったが、観察者がいない条件において参加者が援助場面に登場し援助行動を目撃している設定となっていたため、観察者が全く存在しない条件として成立していなかった可能性があった。山本・池上 (2019) は、この点を改善し、観察者がいない状況よりもいる状況の方が援助者に自己呈示動機が推測されやすいことを示した。また、山本・池上 (2019) では、友人獲得目標を持つと想定される大学生を対象としていたことから、観察者が援助者と今後関わりがないよりある (見知らぬ大学生であるより同じサークルに所属する大学生である) 方が、援助者に自己呈示動機が推測されやすいと予測し、この点も検証していた。しかし、友人関係予期の有無によって動機推測に差はみられなかった。友人関係予期の操作では、自己呈示を連想させる手がかりとして弱かった可能性が指摘されている。なぜなら、友人獲得目標が想起された場合、確かに援助者が自己利益を追求しているとも捉えられるが、友人関係を築くことは、社会や集団の調和が維持される点で望ましく、利他的な側面も併せ持つ可能性が考えられるためである。これに対し、恋人獲得目標は配偶の機会を得たいという援助者の自己利益の追求の側面が強まるため、友人獲得目標よりも、恋人獲得目標を想起させる操作の方が、自己呈示動機を推測させる手がかりとして有効に機能する可能性がある。た

2) 山本・池上 (2019) は、自己呈示動機を「他者が自己に対して好意的な印象を抱くように働きかけようとする動機」と定義し、利己的動機の一側面として位置づけている。

たとえば、Van Vugt & Iredale (2013) は、人は、特に男性において、異性を前にするとより大きな額の寄付を行いやすいことを報告している。これは、女性は配偶相手を選択する際に利他性を重視する (Phillips, Barnard, Ferguson, & Reader, 2008) ため、男性はその要求に応える形で、異性の前で利他性を顕示すると解釈できる。人々が同性に対するより異性に対しての方が、自己呈示を動機づけられやすいことを素朴に理解しているとすれば、性別情報は動機推測の根拠となりうる。事実、Kawamura & Kusumi (2017) は、同性より異性を助ける場合の方が、第三者は援助者に利己的動機を帰属しやすいことを示している。彼らは、被援助者の性別を上げているが、観察者の性別についても同様の傾向がみられると予想される。以上より、本研究は、同性より異性の観察者がいる方が、とりわけ援助者が意中に思う異性の観察者がいる方が、援助者に自己呈示動機が推測されやすいと予測した。

観察者の存在がもたらす効果の一般性

また本研究は、上述した観察者の存在が動機推測にもたらす効果が、異なる種類の援助場面で一貫してみられるのか、山本・池上 (2019) の手続きに倣い検討する。山本・池上 (2019) は、被援助者が倒した自転車を起こすを手伝う場面と、踏切において電車が轢かれそうな中学生を命懸けで救助する場面という 2 種類の援助場面を扱っていた。結果として、観察者の存在×援助場面の交互作用は有意でなく、観察者の存在が動機推測に及ぼす影響は、上記 2 種類の援助場面間で異ならないことが示唆された。

なお、山本・池上 (2019) は、上記の援助場面間の比較を援助に伴うコストの操作 (自転車場面を低コスト条件、踏切場面を高コスト条件) と位置づけ、コスト信号理論 (Zahavi & Zahavi, 1997 大貫訳 2001) の観点から考察していた。本研究でも山本・池上 (2019) にならい、当初はこれら 2 つの場面は援助コストを操作するものとして位置付けていた。けれども、山本・池上 (2019) が扱った 2 つの援助場面の違いを、援助コストの差に帰するには、いくつかの問題点があると考えに至った。自転車場面と踏切場面では、援助コスト以外の要因も同時に変動している。踏切場面は、自転車場面に比べて、援助コストが大きいだけでなく、被援助者にもたらす恩恵の程度も大きい。そのため、コストをかけること自体が利他的な評判に繋がるのか、恩恵をもたらすことが評判獲得に寄与するのかが明確でない。また、両場面では緊急度が異なる。緊急事態の援助行動は、一刻を争う中で

迅速に行われるものであることから、衝動的に行われたとみなされやすいかもしれない。利他的行動が衝動的に行われたかどうかで評価に差はみられていない (Pizarro, Uhlmann, & Salovey, 2003) もの、衝動的に行われる援助行動は、援助者自身に自己呈示を意識する余裕がなく、第三者も自己呈示動機を推測しにくい可能性が考えられる。踏切場面は、自転車場面と比べて、人命がかかった緊急事態であることから、コストと同時に衝動性の認知の程度も異なっていた可能性がある。

ただし、様々な点で質的に異なる 2 つの場面において、観察者の有無や性別の効果が同様に認められれば、観察者効果の一般性を確認することにはなると考えた。そこで本研究では、結果の一般性を確認する目的でこれら 2 種類の場面を用いることとした。

本研究の概要

本研究は、山本・池上 (2019) で認められた、観察者の存在が自己呈示動機の推測に及ぼす効果の再現性を確認することを第 1 の目的としながら、手続き等に修正を加え、第三者は素朴に保持している自己呈示理論に基づき援助者の動機を推測するという仮説を支持するより強固な証拠を提供することを第 2 の目的とする。本研究の仮説および実験手続きは基本的に、山本・池上 (2019) に準じているが、以下の 2 点が異なる。

第 1 に、観察者の性質が異なる。山本・池上 (2019) では、観察者の性質として友人関係予期の有無を操作していたが、本研究では観察者の性別を操作する。第 2 に、自転車場面と踏切場面を設定する意味づけが異なる。山本・池上 (2019) では、上記 2 場面を援助コストの大きさを操作するために設けていたが、本研究では、結果の一般性を確認するために、これら 2 つの場面を設けることとした。

本研究の主な目的は、観察者の存在および性別が自己呈示動機の推測に及ぼす影響を確認することであるが、山本・池上 (2019) に基づき、自己呈示動機の推測から利他的動機の推測を介して印象に至る一連の心的過程についても検討することとした。

本研究の予測

予測は次の通りである。(a) 観察者が不在であるよりも存在する方が、(b) 観察者が同性よりも異性の方が、(c) 観察者が単なる異性よりも援助者の意中の異性である方が、援助者に自己呈示動機が推測されやすい。

方 法

実験参加者と手続き

大学での授業終了後、受講生に実験参加を呼びかけ、参加意思を示した大学生 277 名（男性 130 名、女性 139 名、不明 8 名、 $M_{age}=19.37 \pm 1.18$ 歳）を対象に実験用冊子を配布しその場で回答を求め回収した。実験参加者は援助場面のシナリオを読んだ後、各項目に回答した。実験は 2017 年 7 月中旬と 10 月中旬に実施した。欠損があった 43 名分のデータを除外し、234 名（男性 110 名、女性 124 名、 $M_{age}=19.38 \pm 1.19$ 歳）を分析対象とした。

実験デザイン 観察者の要因は、観察者がいない状況、援助者と同性の観察者がいる状況、異性の観察者がいる状況、援助者が意中に思う異性観察者がいる状況の 4 水準とした。援助場面は、自転車場面と踏切場面の 2 水準であった。いずれも参加者間配置とした。

援助の種類 山本・池上（2019）と同様、援助行動は、駐輪場で倒れた自転車を起こすのを手伝う内容と、電車で轢かれそうな中学生を踏切内に入り救助する内容の 2 種類を用いた（電子付録参照）。援助者が男子大学生、被援助者が男子中学生で統一された。

測定項目 測定項目はすべて、山本・池上（2019）と同一であり、7 件法で回答を求めた（電子付録参照）。

第 1 に、援助者に対する総合評価の指標として援助者の印象を「良い印象を持った」等の 8 項目（ $\alpha=.94$ ）で測定した。

第 2 に、観察者に対する自己呈示動機の推測を「周囲の人に対して自分を良く見せようとしていた」等の 6 項目（ $\alpha=.94$ ）で、利他的動機の推測を「他者を思いやっていたものだった」等の 7 項目（ $\alpha=.91$ 、分析時には相関が低かった 1 項目を除外した計 6 項目を使用）で測定した。

第 3 に、自己呈示文脈の認識を「男子学生 A は、男子中学生 B 以外の人に対して、自己アピールをすることができている状況にいた」等の 4 項目（ $\alpha=.86$ ）で測定した。これは観察者の存在に関する実験操作が有効に機能していたかをみる操作チェック項目として使用した。

本研究の目的と直接関係せず分析に使用していない他の項目は、説明を省略した。

結 果

記述統計と操作チェック

表 1 に各条件の平均値と標準偏差を示す。各変数の α 係数はすべて .80 以上を示し、内的整合性が高いことが示された。また、表 2 には相関行列を示している。

観察者の存在に関する操作確認のため、自己呈示文脈の認識を従属変数として、重回帰分析を行った。観察者

表 1 各条件における平均値と標準偏差、および α 係数

		踏切場面				自転車場面			
		不在	同性	異性	意中異性	不在	同性	異性	意中異性
<i>n</i>		31	32	30	30	29	28	28	26
自己呈示動機	<i>M</i>	2.68	2.98	3.69	4.26	3.02	4.07	4.40	4.21
	($\alpha=.94$) <i>SD</i>	1.35	1.33	1.59	1.42	1.62	1.27	1.09	1.28
利他的動機	<i>M</i>	5.83	5.81	5.43	5.44	5.82	5.65	5.37	5.27
	($\alpha=.91$) <i>SD</i>	0.77	0.93	1.02	0.84	0.90	0.67	0.86	1.01
印象	<i>M</i>	5.96	5.71	5.48	5.76	6.47	6.40	6.32	6.21
	($\alpha=.94$) <i>SD</i>	0.99	0.98	1.03	1.09	0.71	0.77	0.66	0.77
自己呈示文脈	<i>M</i>	3.24	4.27	4.98	5.49	2.62	4.55	5.09	5.12
	($\alpha=.86$) <i>SD</i>	1.48	0.97	1.46	0.86	1.22	1.05	0.96	0.89

表 2 相関行列

	印象	自己呈示動機	利他的動機	自己呈示文脈
印象	—	-.07	.51 ***	-.05
自己呈示動機		—	-.31 ***	.49 ***
利他的動機			—	-.14 *

Note. *** $p<.001$, * $p<.05$ （両側）。

の実験条件は以下のコントラスト変数を用いて分析に投入した。観察者 C_1 （不在条件 = $-3/4$ ，同性条件 = $1/4$ ，異性条件 = $1/4$ ，意中異性条件 = $1/4$ ）は，観察者がいない状況という状況との比較を表す。観察者 C_2 （不在条件 = 0 ，同性条件 = $-2/3$ ，異性条件 = $1/3$ ，意中異性条件 = $1/3$ ）は，同性がいる状況と異性がいる状況との比較を表す。観察者 C_3 （不在条件 = 0 ，同性条件 = 0 ，異性条件 = $-1/2$ ，意中異性条件 = $1/2$ ）は，単なる異性がいる状況と援助者が意中に思う異性がいる状況との比較を表す。また，2種類の援助場面間で自己呈示文脈の認識に差がみられないことを確認するため，援助場面の実験条件のコントラスト変数も作成し分析に投入した。援助場面 C（自転車場面 = -0.5 ，踏切場面 = 0.5 ）は，倒れた自転車を起こす援助場面と踏切で人命を救助する援助場面との比較を表す。その結果，モデル自体は有意であり（調整済み $R^2 = .39$ ， $p < .001$ ），観察者 C_1 と観察者 C_2 が有意に影響していた（ $\beta = .59$ ， $p < .001$ ； $\beta = .22$ ， $p < .001$ ）。すなわち，観察者がいない状況よりも，観察者がいる状況の方が，自己呈示と捉えられやすい状況と認識されていた。また，観察者が同性である条件よりも，異性である条件の方が，自己呈示と捉えられやすい状況と認識されていた。しかし，観察者 C_3 は有意な影響を

示さず（ $\beta = .07$ ， $n.s.$ ），異性条件と意中異性条件の間で，自己呈示文脈の認識に有意差はみられなかった。また，援助場面 C も有意な影響を示さず（ $\beta = .05$ ， $n.s.$ ），援助場面によって自己呈示文脈の認識に違いはみられなかった。以上，異性条件と意中異性条件の間を除いて，観察者の操作は適切に機能したことが確認された。

階層的重回帰分析による仮説検証

観察者の存在及び性別が自己呈示動機の推測に及ぼす影響が，異なる援助場面間でも同様にみられるか検証するため，自己呈示動機の推測値を従属変数として階層的重回帰分析を行った（表 3）³⁾。観察者や援助場面の実験条件に関しては上記と同様のコントラスト変数を用いた。参加者の性別（男性 = 0.5 ，女性 = -0.5 ）を統制変数として投入した分析も先に行ったが，有意な影響を示さなかったため除外した。

結果，Step1（調整済み $R^2 = .15$ ， $p < .001$ ）と Step2（調整済み $R^2 = .16$ ， $p < .001$ ）のモデルはいずれも有意であったが， R^2 の変化量が有意でなかったため，Step1 のモデルを採択した。観察者 C_1 が自己呈示動機の推測に及ぼす影響が有意であり（ $\beta = .31$ ， $p < .001$ ），観察者がいない状況よりも，いる状況の方が，自己呈示動機が推測され

表 3 自己呈示動機を従属変数とした階層的重回帰分析

	β		
	Step1	Step2	VIF
観察者 C_1 （不在 vs. 存在）	.31 ***	.32 ***	1.00
観察者 C_2 （同性 vs. 異性）	.18 **	.17 **	1.00
観察者 C_3 （異性 vs. 意中）	.05	.04	1.00
援助場面 C（自転車 vs. 踏切）	-.18 **	-.17 **	1.00
観察者 $C_1 \times$ 援助場面 C		-.04	
観察者 $C_2 \times$ 援助場面 C		.10 †	
観察者 $C_3 \times$ 援助場面 C		.09	
調整済み R^2	.15 ***	.16 ***	
ΔR^2 Step1 $\rightarrow$ Step2		.02	

Note. *** $p < .001$ ，** $p < .01$ ，† $p < .10$ 。表中の VIF は，Step1 のモデルにおける値を表す。観察者 C_1 は，不在条件 = $-3/4$ ，同性条件 = $1/4$ ，異性条件 = $1/4$ ，意中異性条件 = $1/4$ と重みづけた。観察者 C_2 は，不在条件 = 0 ，同性条件 = $-2/3$ ，異性条件 = $1/3$ ，意中異性条件 = $1/3$ と重みづけた。観察者 C_3 は，不在条件 = 0 ，同性条件 = 0 ，異性条件 = $-1/2$ ，意中異性条件 = $1/2$ と重みづけた。援助場面 C は，自転車場面 = -0.5 ，踏切場面 = 0.5 と重みづけた。

3) 利他的動機の推測，援助者に対する印象を従属変数とした階層的重回帰分析の結果については電子付録に記載している。

やすかった。観察者 C_2 が自己呈示動機の推測に及ぼす影響が有意であり ($\beta=.18, p<.01$)、同性の観察者がいる状況よりも、異性の観察者がいる状況の方が、自己呈示動機が推測されやすかった。観察者 C_3 が自己呈示動機の推測に及ぼす影響は有意でなかった ($\beta=.05, n.s.$)。援助場面 C が自己呈示動機の推測に及ぼす影響が有意であり ($\beta=-.18, p<.01$)、自転車場面よりも、踏切場面の方が、自己呈示動機が推測されにくかった。

SEM による仮説検証

仮説モデルを構成し SEM によるパス解析 (最尤法) を行った (図 1)。分析には Mplus (Version 7.4; Muthén & Muthén, 2015) を用いた。間接効果はブートストラップ法によりサンプル抽出を 10000 回行い、信頼区間を推定した。実験条件のコントラスト変数は、階層的重回帰分析で使用したものと同様である。最終的に採択されたモデルの各パラメータの推定値を図 1 に示した ($CFI=1.000$, $RMSEA=0.000$)。参加者の性別は、有意なパスを示さなかったため除外した。また、観察者×援助場面の交互作用は、階層的重回帰分析の結果、いずれも有意でなかったため、SEM では考慮しないこととした。さらに、自己呈示動機が印象に直接影響を及ぼすパスは、有意な影響が示されなかったため、モデルから削除した。

まず自己呈示動機の推測に影響する要因について報告する。観察者 C_1 が自己呈示動機の推測に及ぼす直接効果が有意であり ($\beta=.32, p<.001$)、観察者がいない状況よりもいる状況の方が、自己呈示動機が推測されやす

かった。観察者 C_2 が自己呈示動機の推測に及ぼす直接効果が有意であり ($\beta=.18, p<.01$)、観察者が同性である状況よりも異性である状況の方が、自己呈示動機が推測されやすかった。ただし、観察者 C_3 は自己呈示動機の推測に影響していなかった ($\beta=.05, n.s.$)。援助場面 C が自己呈示動機の推測に及ぼす直接効果が有意であり ($\beta=-.18, p<.01$)、自転車場面より踏切場面の方が、自己呈示動機が推測されにくかった。

また、自己呈示動機の推測が利他的動機の推測に及ぼす直接効果が有意であり ($\beta=-.31, p<.001$)、自己呈示動機が推測されるほど、利他的動機が推測されにくくなった。

最後に、印象に影響する要因について報告する。利他的動機の推測が援助者の印象に及ぼす直接効果が有意であり ($\beta=.53, p<.001$)、利他的動機を推測するほど援助者に対する評価が高まっていた。自己呈示動機の推測が印象に及ぼす間接効果が有意であり ($B=-0.11$, 99% CI $[-0.18, -0.04]$)、自己呈示動機が推測されると、利他的動機の推測が割り引かれ、援助者の評価が低下していた。観察者 C_1 が印象に及ぼす間接効果が有意であり ($B=-0.11$, 99% CI $[-0.23, -0.04]$)、観察者がいると、自己呈示動機が推測されやすくなり、その結果、利他的動機の推測が割り引かれ、援助者の評価が低下しやすかった。観察者 C_2 が印象に及ぼす間接効果が有意であり ($B=-0.07$, 99% CI $[-0.17, -0.01]$)、同性よりも異性の観察者がいる状況の方が、自己呈示動機が推測されやすくなり、その結果、利他的動機の推測が割り引かれ、評価

図 1 SEM によるパス解析の結果

Note. *** $p<.001$, ** $p<.01$. $CFI=1.000$, $RMSEA=0.000$. 有意なパスを実線, 非有意なパスを破線で示す。図中の数値は標準化偏回帰係数を表す。観察者 C_1 は、不在条件 = $-3/4$, 同性条件 = $1/4$, 異性条件 = $1/4$, 意中異性条件 = $1/4$ と重みづけた。観察者 C_2 は、不在条件 = 0 , 同性条件 = $-2/3$, 異性条件 = $1/3$, 意中異性条件 = $1/3$ と重みづけた。観察者 C_3 は、不在条件 = 0 , 同性条件 = 0 , 異性条件 = $-1/2$, 意中異性条件 = $1/2$ と重みづけた。援助場面 C は、自転車場面 = -0.5 , 踏切場面 = 0.5 と重みづけた。

が低下しやすかった。一方、観察者 C₃ が印象に及ぼす間接効果は有意でなかった ($B=-0.02$, 95% CI [-0.08, 0.03])。援助場面 C が印象に及ぼす間接効果が有意であり ($B=0.06$, 99% CI [0.01, 0.14])、自転車場面よりも踏切場面の方が、自己呈示動機が推測されにくくなり、その結果、利他的動機が推測されやすくなり、評価が高まっていた。一方、援助場面 C が印象に及ぼす直接効果も有意であり ($\beta=-.36$, $p<.001$)、自転車場面より踏切場面の方が、評価が低下していた。

考 察

本研究の第 1 の目的は、観察者の存在が動機推測に及ぼす効果について、山本・池上 (2019) の結果の再現性を確認することであった。また第 2 の目的は、観察者の性別が動機推測に及ぼす影響を明らかにし、第三者が素朴に保持する自己呈示理論に基づいて動機推測を行っているという仮説のより強力な証拠を提示することであった。結果として、観察者がいない状況に比べて、いる状況の方が、自己呈示動機が推測されやすいことが示された。また、同性の観察者がいる状況よりも、異性の観察者がいる状況の方が、自己呈示動機が推測されやすいことが示された。これらの結果は、本研究の予測を支持しており、山本・池上 (2019) および Kawamura & Kusumi (2017) の知見と整合するものであった。さらに、山本・池上 (2019) では、仮説を支持する十分な証拠が得られていなかったが、観察者の性別の影響も確認されたことから、上記の仮説を支持するより強力な証拠が示された。

一方、単なる異性観察者がいる状況と、援助者が意中に思う異性観察者がいる状況との間で動機推測に差はみられなかった。このことから、第三者は援助者の動機を推測する際に、観察者の性別の情報を参照する一方で、援助者がその観察者に好意を寄せているかどうかの情報についてはそれほど重視していない可能性が考えられる。Kawamura & Kusumi (2017) は、男性 (援助者) が女性 (被援助者) を助ける場面の方が、男性が男性を助ける場面よりも、第三者は援助者に対して利己的動機を推測しやすいことを示している。単なる異性条件と、意中の異性条件はいずれも、男性 (援助者) が女性 (観察者) の前で自己犠牲的な行動を取るという構図は共通している。そのため、援助者が観察者に好意を寄せているという情報以前に、男性が女性の前で援助を行っている構図であることをもって、第三者はステレオタイプの配偶者を獲得しようとする利己的動機を推測していた可能性がある。しかしながら、意中異性条件における参加者が単に、「援助者が異性の観察者に好意を寄せている」

という情報を見落としていただけの可能性も考えられる。援助者が好意を寄せているという情報が、動機推測の手がかりとして本当に重視されないのかについては、今後においてより詳細に検討する必要がある。

観察者の存在が動機推測に及ぼす影響は、援助場面の種類が異なっても、一貫してみられることが明らかとなった。階層的重回帰分析の結果をみると、観察者の存在と援助場面の交互作用は動機推測に有意な影響を及ぼしていない。これは、観察者の存在が動機推測に及ぼす影響が、援助場面の違いによって異なることを示唆している。この結果は、山本・池上 (2019) の知見とも整合している。本研究で扱った場面が、自転車を起こすの手伝う場面と踏切で人命を救助する場面という 2 種類にとどまっていた点に留意する必要があるが、質的に大きく異なる援助場面間で一貫して観察者の効果が確認された点は、再現性が高いことを示す重要な知見である。今後は、これら 2 種類の場面以外においても観察者の効果が再現されるのか、詳細に検討していく必要がある。

一方、援助場面が自己呈示動機の推測に及ぼす主効果が確認されたが、この結果の解釈については慎重に行う必要がある。本研究の結果、自転車場面よりも踏切場面の方が、自己呈示動機が推測されにくいことが示された。この結果自体は、山本・池上 (2019) と整合するものである。ただし、山本・池上 (2019) は、この 2 種類の援助場面間の違いを、援助コストの効果として解釈していた。すなわち、自転車場面と比べて踏切場面は、命の危険という大きなコストが伴うため、そのような大きなコストを支払った行為は、自己呈示として認識されにくくなるという解釈である。しかし、自転車場面と踏切場面では、コスト以外にも被援助者にもたらす恩恵の程度も変動する。また、衝動性の認知の程度も変動していた可能性も考えられる。以上より、自転車場面と踏切場面の比較においては、コストの効果のみに帰せられない面がある。本研究も当初は山本・池上 (2019) に準じてコストの観点から仮説を立てていたが、上記の問題に鑑みて、これらの場面は観察者の効果の一般性を確認するための条件として位置づけるのが妥当であると判断した。今後、コストなどの特定要因の効果を明らかにしていく場合には、援助場面を同質なものに揃えたうえで要因操作を行うことが望まれる。

山本・池上 (2019) と同様に、援助場面が印象に及ぼす効果は、間接効果と直接効果で矛盾する傾向が示された。間接効果の場合には、自転車場面よりも踏切場面の方が、自己呈示動機が推測されにくく、利他的動機が推測されやすくなった結果、印象が肯定的になっていた。

一方、直接効果の場合には、自転車場面よりも踏切場面の方が、印象が否定的になりやすかった。この結果は、山本・池上（2019）が考察しているように、踏切場面においては、援助者自身が犠牲になる可能性があったことから、第三者はその行為を倫理的観点から不適切であるとみなした可能性が考えられる。

最後に、本研究の意義と限界点について述べる。本研究は概ね先行研究（山本・池上，2019）の知見を再現しており、観察者がいる状況では援助者に自己呈示動機が推測されやすくなる傾向が頑健であることが示された。また、観察者の性別が動機推測に及ぼす効果を新たに明らかにした点は、第三者が自己呈示に関する素朴理論に基づいて動機推測を行っているという仮説を支持するより強力な証拠となる点で重要である。

ただし、本研究は、自転車場面と踏切場面の2種類でしか検討していない。これら以外の援助場面においても同様の結果が得られるかについては、今後検討すべき課題である。また、本研究は援助者に自己呈示動機を推測する心的メカニズムの解明に終始しているが、今後は、このような推論の生起を抑制するための方略について検討することも望まれる。

引用文献

- Carlson, R. W., & Zaki, J. (2018). Good deeds gone bad: Lay theories of altruism and selfishness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 75, 36–40.
- Cottrell, N. B., Wack, D. L., Sekerak, G. J., & Rittle, R. H. (1968). Social facilitation of dominant responses by the presence of an audience and the mere presence of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 245–250.
- Fein, S. (1996). Effects of suspicion on attributional thinking and the correspondence bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1164–1184.
- Gilbert, D. T., & Malone, P. S. (1995). The correspondence bias. *Psychological Bulletin*, 117, 21–38.
- 針原素子（2015）．向社会的行動が「偽善」と判断される時—推測された動機が及ぼす影響—日本心理学会第79回大会発表論文集，284.
- Havighurst, R. J. (1972). *Developmental Tasks and Education*. (3rd ed.). New York: David McKay Company Inc. (ハヴィーガースト, R. J. 児玉憲典・飯塚裕子（訳）（1997）．ハヴィーガーストの発達課題と教育：生涯発達と人間形成 川島書店）
- Kawamura, Y., & Kusumi, T. (2017). Selfishness is attributed to men who help young women: Signaling function of male altruism. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 8, 45–48.
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1990). Impression management: A literature review and two-component model. *Psychological Bulletin*, 107, 34–47.
- Muthén, L. K. & Muthén, B. O. (2015). *Mplus User's Guide* (7th ed.). Los Angeles, CA: Muthén & Muthén.
- Phillips, T., Barnard, C., Ferguson, E., & Reader, T. (2008). Do humans prefer altruistic mates? Testing a link between sexual selection and altruism towards non-relatives. *British Journal of Psychology*, 99, 555–572.
- Pizarro, D., Uhlmann, E., & Salovey, P. (2003). Asymmetry in judgments of moral blame and praise: The role of perceived metadesires. *Psychological Science*, 14, 267–272.
- Reeder, G. D., Vonk, R., Ronk, M. J., Ham, J., & Lawrence, M. (2004). Dispositional attribution: Multiple inferences about motive-related traits. *Journal of Personality and Social Psychology*, 86, 530–544.
- 谷口淳一・大坊郁夫（2005）．異性との親密な関係における自己呈示動機の検討 実験社会心理学研究，45，13–24.
- Van Vugt, M., & Iredale, W. (2013). Men behaving nicely: Public goods as peacock tails. *British Journal of Psychology*, 104, 3–13.
- 山本佳祐・池上知子（2019）．第三者が援助者に自己呈示動機を推測するメカニズム：関係が予期される観察者の存在と援助に伴うリスクが及ぼす影響 人文研究，70，91–112.
- 山本佳祐・田中宏明（2018）．援助行動に対する第三者による批判の規定因：自己呈示文脈に注目して 社会心理学研究，34，26–37.
- Zahavi, A., & Zahavi, A. (1997). *The Handicap Principle: A Missing Piece of Darwin's Puzzle*. Oxford: Oxford University Press. (ザハヴィ, A., & ザハヴィ, A. 大貫昌子（訳）（2001）．生物進化とハンディキャップ原理：性選択と利他行動の謎を解く 白揚社）

When helping behaviors are viewed as self-presentation: Effects of observers' presence and their gender on motive inference

KEISUKE YAMAMOTO (*Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University*)

TOMOKO IKEGAMI (*Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University*)

Yamamoto and Ikegami (2019) hypothesized that third parties infer the helper's motive based on the naive self-presentation theory and demonstrated the effect of the observers' presence on motive inference. This study aimed to replicate this effect and provide convincing evidence for this hypothesis by manipulating the observers' gender. We conducted a questionnaire experiment with 277 undergraduates using scenarios of helping experiences. Similar to Yamamoto and Ikegami (2019), the results showed that self-presentational motives were more likely to be attributed to helpers in the presence versus absence of observers. Importantly, the results showed that self-presentational motives were more likely to be attributed to helpers when there was an opposite gender versus a same-gender observer. However, there was no difference in motive inference between the conditions when there was a mere opposite-gender observer versus an opposite-gender observer with whom the helper was in love. The effects of the observers' presence and their gender on motive inference were consistently confirmed across the two types of helping scenes. This study successfully provided convincing evidence for the above hypothesis.

Key Words: motive inference, self-presentation, observer, helping scene, a third party